「“人づくり”と“PS（パーフェクト・セーフティー）運動”が、わが社の両輪」

株式会社吉田電設様　代表取締役 吉田良信様（秋田県大館市）

電気の安定供給は電力会社の使命。その最先端の現場、配電工事で北秋田全域を支え、自然災害や事故で電気が停まればイの一番に駆けつける。実は“安全”にかけても東北一の技量を誇っている。『PS運動』と名付けた安全衛生活動で、全社一丸となって“完全無災害”を目指すその情熱と知恵には、学ぶべき多くのものがある。吉田良信社長の半生をかけた安全への道をうかがった。

DATA&社長の履歴

配電線設備工事／一般電気設備工事

履歴

昭和22年　秋田県鹿角市生まれ
昭和 8年　有限会社吉田電設を創業
平成18年　創立10周年を機に株式会社へ改組
平成21年　東北電力配電工事安全推進協議会より、団体、個人両部門で「安全管理優良者表彰」を受ける

吉田社長への通信簿

社長をよく知るお二方に5段階評価で採点していただきました。

大坂谷 光義さん
勤続38年
工事課長

吉田社長の「家族想い」に　5

社長とは40年近くの付き合いになります。いつも家族のことまで気を配ってくれるのが有難いです。年に2度ほど『家族通信』という、会社から直接家族に知らせたい、体調管理などの栞（しおり）も郵送されます。酒好きの私にとっては、女房に「飲み過ぎ」がバレてしまうのは辛いですが（笑）。

*

岩渕 真司さん
勤続16年
工事係長

吉田社長の「危機察知能力」に　5

この仕事ではほんの些細なこと、たとえば髪が長すぎたり、服装でシャツがはみ出ていたりするだけで、作業中どんな事故につながるかわかりません。そんな時は必ず社長から注意を受けます。こうした危機を察知する能力は抜群！　私たちも安全に関しては絶対にスキを見せられなくなりました。

“電気の防人（さきもり）”としての誇り

秋田県大館市。冬になると深い雪で覆われる北秋田のエリアで、長年“電気”を守ってきたのが吉田電設だ。大館市周辺に電気工事会社が60社ほどある中で、配電工事まで手がけるのは3社だけ。昨年の正月も元旦から雪害で停電が起こり、東北電力様の出動要請で電力復旧に尽くした。その後、3月に起こった東日本大震災でも、1週間後には被災地に入っている。

「震災は本当に不幸な出来事でしたが、電気が復旧すると、将来にひと筋の光りが灯ったように心底みなさんに喜んでいただきました。社員はこの復旧作業に関わって、自分たちの仕事に誇りを持てるようになったと思います」。

“電気の防人”としての素養は父親譲り。亡き父君は東北電力様の社員で、変電所の保守・点検をしていたからだ。当時は変電所構内に社宅があり、社長が幼少の頃は仕事をする父親の机のそばで遊んでいた記憶もある。「寡黙な人」だったというが、その電気を守る後ろ姿は、社長のDNAに同じ魂を刻んだ。

大館市の隣にある鹿角市出身の社長は、高校を卒業すると兄が始めた電気工事会社に就職。そこで配電工事を担当した。その後、奥様の実家がある大館に居を構え、28歳の時に独立、現在は21名の従業員を抱える。

配電工事に初めて関わった当時は、電柱を建てるのもまだ人力が頼りの時代。木製の電柱を肩に担いで運び、建てる穴もみんなで掘った。穴の深さは約2.5m。それも電柱を建てやすいように階段状に掘る。体力勝負の重労働だ。

「穴掘建柱車や高所作業車がある今とは雲泥の差。アイチさんは本当にいいものを作ってくれたと、大変感謝しております」（笑）

“痛恨の事故”で「PS運動」は生まれた

社業も順調に推移し、有限会社となって6年目の平成14年に同社は大きな転機を迎える。当時導入されたばかりの「間接活線工法」で労働災害を起こしてしまったのである。ケガは軽度の火傷程度で済んで、幸いにして大事には至らなかったが、社長にとっては30年以上この仕事に携わり初めて体験した従業員の事故だった。

「この地域である程度の信頼と評価を頂いているという、それなりの自負が当時はありました。しかし、この事故でそれが崩れてしまった。何より従業員やその家族にもう二度と痛い想いはさせてはならないと、強く誓いました」。

それからの社長の行動は迅速だった。既に経営に参画していた長男の悟史専務とともに、二人三脚で完全無災害を目指す「PS運動」を翌年立ち上げ、まず全社一丸となって目標としたのは、サービスの品質や安全性を保証する国際規格ISO9001の取得だ。これは3年後の平成17年に認証され、現在も秋田県内の一般配電工事会社でこの認証を得ているのは同社だけという偉業だ。社長が事故直後から安全に賭けた並々ならぬ意気込みが伝わってくる。

「PS運動」には充実したオリジナルのユニークな取り組みが多い。実際の年齢より10歳若い自分をイメージしてテキパキと行動し、安全性を高めようという「セルフイメージ年齢推進活動」をはじめ、安全を確認する指差呼称を徹底するイメージ・キャラクター『ヨシだ君』も、“よしだ”電設ならではのキャラクターだ。その『ヨシだ君』が登場する手作りの「安全衛生壁新聞」には、安全に関するワンポイント・アドバイスがイラスト入りでわかりやすく解説され、社内の目立つ場所に貼り出されている。

「安全は1日にしてはならず」と、社長の意を汲んで、これら日常の様々な取り組みを発案したのが専務だ。「もう二度と事故は起こさない」という強い意思が、次代にしっかりと受け継がれている。

指差呼称の『ヨシだ君』。「講演などで紹介すると、結構ウケます」という人気者だ

安全は“人づくり”から

パーフェクトな安全を追求する「PS運動」と並び、事故を教訓に社長が力を入れたのが“人づくり”だ。

「電気工事の仕事は技術職と言えますが、職人気質が高じると自分の領域だけに閉じこもりがちです。そうなると、新しい技術や考え方を積極的には取り入れられないし、お客様とも満足にコミュニケーションが図れなくなる。その意味では、自分の腕に誇りを持ちながらも、何事にも謙虚に接する姿勢が不可欠です」。

この謙虚な人づくりには「何事もマナーが第一歩」と、外部から講師を招き、身だしなみからお辞儀や返事の仕方までを改めて教育している。配電工事や建柱工事は公道での仕事がほとんどで、笑顔やマナーひとつで地域住民の感情は大きく変わる。マナー向上は社是である「地域に迷惑をかけず、愛される企業になる」一番の早道でもあるのだ。その考えは徹底していて、工事の騒音を抑え、ご近所に迷惑をかけないよう高所作業車をいち早くバッテリー車に切り替えたのも、社長の強い意向だった。

表彰盾を手に記念撮影をする吉田社長と大坂谷課長

“電気の防人”としてのDNAは、三代目の悟史氏にも引き継がれた

「“人づくり”と安全は、車の両輪」と語る吉田社長。あの事故の日から7年を経た平成21年、その取り組みは“安全を日々追求した優良企業”として評価され、東北電力配電工事安全推進協議会から団体、個人両部門で「安全管理優良者表彰」を受けるに至る。

「これまで仕事をやってきて、一番誇れることは『安全管理優良者』として表彰を受けたこと」と、人生を振り返った吉田社長にその通信簿を聞くと、「4点。満点だと、これから何もする必要がなくなる」と穏やかに笑った。続けて「でも、息子には5を上げてもいいかな」と、将来“安全第一”を引き継ぐ専務にエールを送ってくれた。

取材を終え、会社をお暇（いとま）する時、社員の方々が一列に並んでお辞儀をしてくれた姿が印象に残った。まさに秋田県人らしく真面目に、そして真っすぐに安全を追求してきた社長の元、その意思が企業の隅々まで浸透していることを確信できる一瞬だった。